

入賞

一般建築物の部

～地域で見守る子どもの居場所～

児童養護施設房総双葉学園小規模グループホーム

千葉市の住宅街に建てられた小規模グループホームは、地域の中で子供たちと職員が一般住宅で生活する児童養護の形態である。

本園が近傍にあり地域での受け入れ環境があることも、地域に溶け込みやすい環境であったのであろう。

子ども達が地域に見守られながら安全に暮らすために、施設内の様子が街へそれとなく染み出す隠れ家スペースは、子ども達の隠れ家であり、街との接点ともなっている。

内部空間は、居場所としての多重回遊動線と家事の最短直線動線を上手に組合わせて、職員が執務をしながら子ども達の様子を見守ることができる。



1.3mの低天井部:子どもたちの隠れ家であり、街との接点となる
(撮影全て:浅川敏)

また、子ども達と職員の心と体の状況に応じて、自分の居場所を選択できるリビング、階段、セカンドリビング、隠れ家スペースと多様な空間を用意して、6名の子ども達と入れ替わりで同居する職員にかかる精神的なストレスを緩和させることを試みている。

基本部材は規格材を使用しつつ、部分的に鉄骨を用いたハイブリット構造でローコスト化を実現すると共に、自然光や自然通風によるパッシブ建築となっており、省エネ効果をあげている。

地域の子ども達も遊びに来るといふ当施設は、これからの児童福祉施設のあり方を提示している。
(久富 清敏)



外観正面:中央部のガラススリットが街に室内の気配を伝える

建築主: 社会福祉法人創英舎

設計: 株式会社OOOarchitecture一級建築士事務所

施工: 株式会社シー・エス・ホーム

所在地: 千葉市緑区平山町1921-4

入賞

一般建築物の部

～五感を触発し、回遊する空間で子どもたちの感性を育む～

Bring up みどり子ども発達センター



鳥瞰 (撮影:OOOarchitecture)

この施設は、発達障害をもつ子ども達が遊びの中で感性を育むことができる居場所をつくること、地域との繋がりや保護者支援も行える場所として計画された。

建物は中庭を中心に円状に療育室等、個室やアルコーブが中庭から離れた配置としている。地形に沿って緩やかにレベル差のある床や屋根、段差を利用した室を移動することで視線や空間スケールの違いを体感できる。中庭は安心して遊べる屋外で光や風の自然を感じ、デッキは時には食事の場、室を介さない通路としての利用も可能で、隣接する常設アートギャラリーや正面玄関からもアプローチ可能な位置付けだ。

福祉が地域に開くことの重要性が求められる反面、過度な刺激を避けたい子ども達の過ごす場のあり方を解決していく手がかりがあると感じた。建物形状からイメージしたキャラクターデザインや感覚的に受け入れられるサインデザインも好感が持てる。現状、正面玄関が敷地内の駐車場側にあること、道路側から地域に開くホールに直接アクセスはできるものの、中庭までの抜けはやや分断した印象だった。地域に根付いた施設になるには時間も必要だが、土台はできており今後の運用や活動を見守っていきたい施設である。
(藤本 香)



中庭
(撮影:ShotaHiyoshi)